

中国60年代と世界

第2期第3号(通巻第10号) 2017.8.31

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会(幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580川崎市多摩区東三田2-1-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

公開研究集会報告…(1) / 例会報告…(3) / 8月例会予稿「白雲における『一打三反』を見る…鳥本まさき(6) / 中国の政権と個別具体的な人々を分けた方がいい…鳥本まさき(7) / 『反右派』60周年に思う…福岡愛子(10) / 【蔵出し批評】文化大革命は階級闘争である…西順藏(13) / 胡傑監督『林昭の魂を探して』字幕その1…土屋昌明編訳(16)

公開研究集会「反右派運動とは何だったのか」報告

政治運動が、人口分布や教育程度、階級などの社会構造に影響

2017年6月24日(土)、専修大学神田校舎1号館301教室(地下鉄神保町・九段下)において、本会が主催で公開研究集会「反右派運動とは何だったのか」を開催した。以下に、ピラに書かれた説明を記しておく。

「1957年の今日(6月8日)、『人民日報』に毛沢東の執筆とされる「これはなぜか」という社説が掲載されました。これが反右派運動の始まりとされます。それまで党に対する意見の提出を奨励していた中国共産党が、てのひらを返すように、意見を提出した人々を摘発して批判し、農村の労働改造所へと送り込んだものです。この政治運動のあと、中国では全国的な大飢饉がおきました。労働改造所へ送り込まれた人々は、冤罪に悩まされたのみならず、食糧にすら困る状況となりました。悪名高い夾辺溝農場での、想像を絶する人権抑圧と飢餓のありさまは、王兵監督『無言歌』によって、日本の観衆にも広く知られるところとなっています。今回の研究集会では、反右派運動によって辺境の農場で労働改造を経験し、天安門事件以後に香港に移って中国現代史を書き続けてきた申淵氏を招き、反右派運動の経験者へのインタビューをしている翰光監督とともに、「反右派運動とは何だったのか」を討論します」。

時間は次の通り。15:00~15:20趣旨説明(研究会代表) 15:20~16:20翰光監督の映像上映と紹介「気骨ある中国知識人が語る50年代中国」 16:35~18:05申淵「反右派運動とは何だったのか」(通訳:徐行)

翰光は1958年、中国東北部生まれ、ドキュメンタリー映画監督。1987年に日本留学、以後、日本

で作品を作り続けている。代表作に『亡命—遙かなり天安門』(2011年)。『映画芸術』459号が参考になる。<http://eigageijutsu.com/article/202404075.html>

申淵は1936年、上海生まれ、56年に中共に加入、58年に右派とされて党籍を剥奪、内モンゴルで労働改造。78年に請われて党に戻ったが、89年に64学生運動鎮圧に不満を感じ、92年に香港に移る。代表作に『天地良心』三部作。本書はこの数年に香港五七学社から続けて出版されており、作者の自伝を軸に、中国近現代史、上海の変遷、中国共産党と毛沢東の政治運動および特務機関の歴史を述べたもの。作者本人の数十年にわたる日記と、紅衛兵の小報、中共幹部として中国各地の檔案館で収集した文献資料や写真資料を使っている。中国国内では禁書とされている。「香港五七学社新書発布還原歴史」を参照。<http://ca.ntdtv.com/xtr/gb/2012/05/11/a699308.html>

趣旨説明——反右派運動研究の重要性和観点

冒頭、幹事・土屋が、研究会の紹介と本公開研究集会の趣旨を説明した。文化大革命(文革)および世界史における影響を研究する目的で、文革50周年を前にした2015年3月に発会、例会で意見交換を進めて昨年末、勉強出版からアジア遊学の1冊として『文化大革命を問直す』を出した。今年は、反右派運動60周年記念として、本集会を開催した。

中国の歴史観では、反右派運動は必要な政治運動であり、問題は拡大化にあるとされ、また反右派運動に関する研究そのものが抑圧されている。日本では中国現代史に対する無関心が広がり、如上の中国の歴史観への批判力に乏しいだけでなく、反右派運

動についての認識も深まっていない。

反右派運動の歴史的な特殊性を措くとしても、主流のイデオロギーや政治観点に対する異見を弾圧し、ひいては知識人を抑圧した歴史的事件として、反右派運動は永く記憶されるべきであり、そこから歴史的な教訓を汲み取るべきである。現代日本の私たちにとってもよそ事ではない。いわゆる反右派運動は、その内実の研究方向性を名称によって示すことができる。つまり、①「反・右派運動」なのか、②「反右派・運動」なのか、③「反右・運動」なのか、④「反・民主運動」なのか、という問題である。

①では、右派運動というものがあり、それに反対する、ということになる。そうすると、57年当時に主流の政治観点に異見を出した者たちは、運動をおこなう集団だったのか、という問題が生じる。なるほど、北京大学の雑誌『広場』の学生たちなどは、集団として運動したとみることができるかもしれない。しかし、多くの事例はそうではない。

②では、57年の政治運動は右派に反対する運動だった、ということになる。そうすると、異見を出した者たちは右派という派閥のようなかたちで存在し、それに反対する政治運動であるから、57年までの百家争鳴はこの運動からは切り離されてしまう。

③では、「右」と「左」の対立で歴史をとらえることになる。つまり、全体主義とそれへの反対として共産党の歴史をとらえるので、「反右運動」はより一般名詞に近づく。「反右運動」は中国共産党史で反復されて起こった現象であり、57年の運動はその極めて典型的な事例ということになる。

④では、重点を、百家争鳴をきっかけとして起こった論争に置き、それを民主運動の一種として認識することになる。たとえば、自由と民主を強烈に主張した林昭の事例などをみると、その民主的な特徴を強調するべきだとも考えられる。

現在、中国政府は檔案の管理を強化しており、われわれ外国人が当時の一次資料を閲読できる可能性は低く、檔案が廃棄される可能性もある。新資料が見いだせない状況では、口述史（オーラル・ヒストリー）が重要となるものの、50年代の歴史に関しては、生存者が年齢的に最終段階に来ている。急いで口述を採る作業を進め、その動画やドキュメンタリ

ーをアーカイブする必要がある。翰光監督はこれを独力で実践しており、私たちは彼に学ぶべきである。申淵氏はかつて共産党幹部であったときに内部資料を披見できた立場であり、自身は戦後のすべての政治運動を経験している。私たちは、申淵氏の研究と口述からも多くを学ぶことができる。

翰光の所説

翰光氏は、多くの右派人士にインタビューをおこなっている。今回は、数名のインタビューを簡単に編集し、日本語字幕をつけて公開した。すべて本邦初公開の内容で、非常に興味深い。なかでも、李銳、王書瑤、張先痴が語る反右派経験は出色であった。李銳は1917年生まれ、先日、100歳の誕生日を迎えたが、その祝いの会を家族だけでおこなうよう当局から制限されたことが話題となった。中国共産党の老幹部で、民主改革派の重鎮とされている。1958年に毛沢東の秘書となったが、59年の廬山会議に際して批判された。文革中も批判されて投獄された。彼に対するインタビューのクリップというだけで、非常に価値が高い。廬山会議前後に、言葉の使い方で批判されたり、劉少奇が会議でうまく李銳の責任を減じさせたりした事情などが語られた。関連の話は、李銳『中国民主改革派の主張』（小島晋治編訳、岩波現代文庫、2013年）第4章を参照のこと。王書瑤は1936年生まれ、1955年に北京大学物理系に入学、57年にスターリン主義に反対して右派とされて労働教養に送られた。クリップでは、楚少林という学部長に呼びだされ、労働教養に送られたこと、収容先での飢餓のことなどが語られた。この時期の北京大学物理系は、国内で最高レベルの学部であり、方励之や陳一諮や顧雁など、現代史で問題となる人物が多くいた。自伝として北京大学の反右派の状況を書いた『燕園風雨鏄人生』（労改基金会、2007年、別名『1957年之燕園風雨』）があり、クリップのなかでもその本に言及していた。張先痴は1934年生まれ、57年に極右とされて労働教養に送られ、61年に脱走した。クリップでは、労働教養と労働改造での扱いの違いや処遇などが語られた。労働教養の実情を書いた『格拉古実録』（台北市：秀威資訊科技出版、2014年）2冊が出版されている。彼に関し

ては、胡傑監督がドキュメンタリーを、邱炯炯監督がドラマを撮っている。後者は2015年12月、東京の中国インディペンデント映画祭で上映され、専修大学土屋研究室で邱監督の講演会をおこなったことがある。前者は本邦では上映されていないが、9月末に本会で張先痴を日本に招いて集会を企画しているので、その際に日本語字幕をつけて上映できるようにしたい。

申淵の所説

申淵氏の所説は、上述の③の立場で57年の問題を考察しようとしており、建国以前の共産党史をもふまえ、また文革および64天安門事件も射程に入れている。その際、「反右運動」の基本的な方法が、建国以前の共産党とソ連の関係に由来すること、57年までの民主・自由を求める中国国内の動向を闡明すればするほど、「反右運動」を起こした動機もハッキリすること、が強調されている。申淵氏は、こうした事情について、浙江省の高級幹部が残した内部資料を参照して述べており、非常に興味深い事例が紹介された。議論の詳細については、本誌第2期第2号「反右運動の歴史的淵源とその深遠な影響」を参照のこと。申淵氏が発言で強調したことのうち、2点だけを記しておこう。ひとつは、戦後の中国社

会では、人口分布や教育程度や階級などの社会構造そのものが、政治運動の影響を受けている点である。政治運動は、あたかも戦争が起こったのと同様な、社会構造の大きな変化を生じさせた。とくに、教育を受けた知識階級が低所得層を増加させ、その反対に、文化程度の低い少数の高所得者が力を持っていること、そのため文化を担う中間層が成長していないという。もうひとつは、人々の倫理観を担っていた伝統文化が党性に成り代わった点。党内における自分の位置が第一であり、それをうまく運ぶために伝統文化が利用される。科学性や民主的な考えは、これと縁を持たない。こうした現代中国社会の問題点は、50年代以降、50数回もおこなわれた政治運動の結果だという。さらに研究の余地があるだろう。最後に、見事な通訳で理解と対話のレベルをあげてくださった徐行氏に感謝を表したい。

毛沢東は、実際にいくたびもの戦争を勝ち抜いてきた軍師であった。彼の思考方法は、終始、戦争の思考方法である。反右派のときもそうだった。「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」と喝破したのは王陽明だが、彼も軍師だったからこそ、この言葉を吐けたのだろう。毛沢東からすれば、「人民の中の賊を破るは難し」だったのか、などと申淵氏の話を聞いて思った。（文責：編集部T）

研究会（例会）報告（6月29日）

向承鑑に対するインタビューについて映像を交えて紹介

2017年6月29日午後7時から、専修大学神田校舎1号館ゼミ室で6月例会を開催した。陝西省西安市に在住のインディペンデント・ジャーナリストである江雪氏が、「星火事件」に関する調査、なかでも中心人物のひとりである向承鑑に対するインタビューについて映像を交えて紹介した。参加者は、矢吹・朝・王・福岡・鳥本・酒井・森・土屋、ほか専修大学関係者3名。江雪は、国際交流基金の招いた中国ジャーナリスト4人のひとりとして来日。本会幹事の土屋が江雪からメール連絡を受け、日程が合ったため例会参加が実現した。経緯は次のとおり。土屋は本年正月に「星火」の中心人物の顧雁に会い、本

会編『文化大革命を問い直す』を2冊贈呈し、もし可能なら向承鑑に送ってほしいと依頼した。顧雁は向承鑑に1冊を送り、それを受け取った向承鑑が江雪に本会のことを話した。

例会の通訳は前半を鳥本が、後半を土屋が担当した。以下、彼女の発言の要旨およびフロアーとの質疑を、簡単な注釈をまじえながらまとめておく。

江雪の「星火」への問題意識

江雪は、「星火」関係者にひろくインタビューをして、その際に短編の記録映像を撮っている。これは胡傑に次ぐ仕事であるが、胡傑とはべつの新たな

側面を開拓するものである。

話はまず、なぜ星火に関心を持ったかという点から始まった。彼女は甘肅省天水の出身で、向承鑑ら「星火」のメンバーが下放した農村、馬砲泉に近いところに実家がある。「星火」の中心人物のひとりである張春元は、トラクター工場にいたというが、彼女の実家の近くにもトラクター工場があったので、同一の工場かと思っていたという。のちに調査の結果、別の工場だったとわかった。とはいえ、自分の出身地でおこった事件であり、しかも自分がメディアで仕事をしておりながら知らなかったということに、非常に恥ずかしさを感じた。それが強烈な動機となったわけである。

じつは、知らなかったのは彼女だけでなく、実家の人たちもみな知らなかった。星火事件のときに彼女の父親は14歳、おじいさんは農家でお焼きを売っていた。人民公社で穀物の分配を受けたが、おじいさんは子供たち（江雪からすればおじ・おばにあたる）に食べ物を分配したために、おじいさん本人は餓死してしまった、と家族内では伝えられている。「この時代の中国人は、どの家庭でも、現代史の悲惨な経験と関係しないところはない」と彼女はつぶやく。

父親の腹違いの弟（つまり江雪のおじ）は、蘭州大学で右派にされた。江雪が80年代、天水の第十二中学入学時、おじは同中学の校長だった。彼女は星火事件について調べてからやっと、このおじが向承鑑らと同時期に右派にされたことに気がついた。彼は蘭州大学化学系の助手で、向承鑑と同じ専攻だったが、処分が軽く、おそらく学校に残されて審査する程度ですんだようだった。おじは2015年に亡くなったため、取材できなかったのが惜しい。家の歴史と星火事件が関わっていたのである。「自分は記者として、目の前の現実ばかりを追ってきたため、過去の歴史について看過してしまっていた」。

今年（2017年）は反右派60年、去年は文革発動50年だったが、中国のメディアは、ほとんどこのことをとりあげない。「これは、われわれが言論の自由の問題について、1957年と同様な状況に直面しているように感じさせられる。1957年のあと、大躍進、人民公社、そして「一言堂」（鶴の一声）となったのであり、このことと大飢饉の発生とは関連

している、と向承鑑が語っていた」と彼女はいう。

「最優秀な人々を悲惨な目に」——取材を通じて

胡傑のドキュメンタリー『星火』はすぐれた作品だが、あれだけの大事件の記録は、たった1本のドキュメンタリーでは足りない。「自分が少しでも細部を後世に伝えられれば価値があるだろう。向承鑑に対するインタビューは、私の仕事の一部で、ほかに50人以上の関係者にインタビューした」という。

そのひとりに孫自筠がいる。彼は譚蟬雪らといっしょに下放し、同じ公社だった。しかし、当時、彼らはお互い自由に意見交換ができたわけではなかった。大飢饉のありさまを目にした孫自筠は、党員で組織を信じていたから、党機関誌『紅旗』に手紙を書いて、大飢饉のようすを伝えた。中央は現場を知らないんだと孫自筠は考えたのだ。手紙を出して1ヶ月くらいで、彼は逮捕され、譚蟬雪や向承鑑ら青年達は絶望させられた。現場のことを上層部に伝えても、うまくいかない、まず現場の自分たちが相互に連合することが必要だと考えるようになった。

孫自筠は脱獄し、新疆を放浪した。名誉回復後、作家となって、唐王朝の皇族に関するシリーズの歴史小説を書いた。テレビの大河ドラマ『大明宮詞』は彼の原作をドラマにしたものである。

張春元の弟で河南鄭州在住の張春培にもインタビューした。彼は兄を懐かしんではいるが、張春元の行動の価値はあまり理解していないようだ。ほかに、張春元の蘭州大学でのクラスメートも取材した。あまり語りたがらなかったが、それでも多くのことを聞くことができた。

譚蟬雪の自宅にも何回か通った。彼女は最近、体調が悪く、老人ホームに入っている。

顧雁は、星火事件についてずっと語りたがらなかった。それは彼が当時、林昭と恋愛関係だったことと関連があると思われる。林昭が顧雁に書いた多くの手紙は顧雁の檔案として現在、上海の裁判所に封印されている。顧雁は檔案を見たいと思っているが、現在の状況では閲覧を許されない。顧雁によれば、林昭は星火事件にはそれほど関わらなかった。林昭の詩が『星火』に載せられたが、はじめ彼女は張春元らが『星火』を作ることに反対だった。雑誌の形

で出すのは危険だと彼女は指摘していた。顧雁は星火事件についてずっと口をつぐんでいたものの、江雪は取材に成功した。「顧雁はいい人で、アポ無しで直接、安徽に飛んで電話をかけ、自分は天水から来た若者で、これこれで『星火』に関心をもっていて先生を訪問したいと率直に話したら、うけいれてもらえた」という。ただし、映像は撮らせてもらえなかった。

顧雁と向承鑑のあいだには、大きなわだかまりはないようだが、譚蟬雪に対して顧雁は意見があるようだ。譚蟬雪は回想録で星火事件における自身のありかたを誇張しているということのようだ。また、譚蟬雪が単独で香港脱出を図って拘留され、張春元が個人的な恋愛感情から彼女を救出に行って捕まり、結果、星火グループの逮捕を招いた点で、顧雁が彼女に不満を抱くのは理解できる。

杜映華の家族のほか、張春元の銃殺の直前に獄中でいっしょだった王中一もインタビューした。彼は、張春元の最期の言葉を譚蟬雪へ伝えた。また、武山の農民たちにもインタビューした。取材の副産物もある。上海では、星火事件以外の右派の老人たちにも大量に聞き取りし、なかに著名な歴史学者である王国維の孫もいた。記事はツイッターで発表したのが、たびたびページは閉鎖された。多くの材料が整理の途上で、なるべく時間をさきたいと思っている。

自分はもともと記者だし、一人で採訪しているため、映像記録を多くとれない。向承鑑の家には3日間逗留し、今回上映した映像はその一部分にすぎない。向承鑑は毎朝3時間インターネットで外国の各種の情報を読んでいる。向承鑑について感動的なのは、彼が18年間の懲役期間に一度も罪をおかしたと認めなかったこと、つまり人格に表裏がないことである。彼らの世代は本当に優秀な世代だった。民国時期に生まれ民国の教育を受けている。蘭州大学に入学当初は、みな科学者になって人民に貢献しようと高い志を持っていた。夜までランプの灯りで勉強し、校長が部屋に帰って休むよう勧めたという。そのまま研究をしていたらノーベル賞を取るような人も出たかもしれない。「反右派運動は、中国の最も優秀な人々を悲惨な目に遭わせた」と彼女はつぶやくように語った。

江雪と参加者との質疑応答

フロアー：発表者は世代的に、祖父母のことを孫むすめが調べている感じなのか。

江雪：1974年生まれだから孫よりは少し上。向承鑑は20年近くの懲役を経て70年代末に出所、40歳をすぎ結婚して子どももいる。1996年に甘肅の小さな中学校の校長を引退後、自伝を書き始めた。公開出版はできない。

フロアー：向承鑑の大著『馬克思主義之異見与反思（マルクス主義への異見と反省）』（香港：九江文化出版公司、2014年）は、右派とされた彼が実は正統マルクス主義だと説くものだろう。彼は、習近平の路線についてどう考えているのか。

江雪：就任当初は、政治がよい方向に行くのではないかという、とくに知識人のあいだに広く持たれた期待感があった。向承鑑がこの本を香港から出版したとき、公安が3人向承鑑の家に来た。彼はいま、もう1冊、毛沢東に関する本を書いているが、手元には資料が少なく、執筆に苦しんでいる。また、鄧小平の反右派に対する態度に関心がある。右派を残したこと、つまり反右派運動は正しかったとしていることだ。これについて向承鑑は鄧小平に手紙を書いた。返信は無かった。鄧小平の改革開放については賛同している。1989年の対応には反感を持っている。

フロアー：回想による情報は一面的になりがちである。だから、譚蟬雪の述べたことだけでなく、顧雁やほかの人の事実もおさえなければ、星火事件の全貌はわかったとはいえない。ぜひいろいろな人の意見を総合して、星火事件の全貌を本にしてほしい。

江雪：回想には、やはり偏向や記憶違いがあるので、ほかの資料を使って正していく必要がある。自分自身を語るのには偏りがちなので、第三者の回想を聞くことが必要だ。

フロアー：発表者の世代は胡傑の世代と違うので、若い世代が取材することから違う側面が見えてくるはずだ。周辺の人々に取材することから見えてくる側面もあると思う。（敬称略、文責：編集部T）

例会 (2017年8月31日) 発表予稿

「白雲における『一打三反』」を見る

鳥本まさき

農村における文化大革命を扱ったドキュメンタリー「白雲における『一打三反』」を上映してディスカッションしたいと思う。

「一打三反運動」が村で巻き起こったのは賈氏が 19 歳のとき。当時はただ沈黙し見守るだけだったが、40 年を経て、「目を見開き」調査することを決める。

「一打三反」の内幕は何なのか、村民間でなぜ相互に危害が加えられることになったのか、誰がつるし上げられたのか、誰がそれを主導したのか。賈氏は 100 人余りの老人にインタビューし、記録していく。素朴で温かみのあるアプローチで当事者たちの陳述を追い、当時の記憶のかさぶたがはぎとられていく。

「一打三反」運動とは、文化大革命期間、中共中央が 1970 年 1 月 30 日に出した「反革命破壊活動に打撃を与えることについての中共中央の指示」を発端に全国で巻き起こった政治運動で、その内容は、反革命破壊活動に打撃を与え、汚職・窃盗に反対し、投機取引ならびに贅沢浪費に反対する、ことにある(百度百科を参照)。

「白雲における『一打三反』(原題:「一打三反在白雲」)」を撮った賈之坦氏は 1951 年生まれ、湖北省常德市白雲郷でミカン農家を営む村民、映像工作者。2005 年に「中国独立ドキュメンタリー映画の父」と呼ばれる呉文光氏が率いる草場地工作站「村民影像〔映像〕計画」に参加。「村民影像計画」は一般の村民が録画カメラを手に取り、主流メディアの解

釈から解放され、自ら声を発しようと試みる映像計画。EU の資金援助を受けている。これまで、ドキュメンタリー短編 1 本と長編 5 本を制作し、「白雲における『一打三反』」は 2013 年の北京独立影像展でドキュメンタリー映画賞を受賞。

ちなみに、「村民影像計画」は 2010 年に一段落し、「85 年以降生まれ」が多く参加した「民間記憶計画」に姿を変える。この「民間記憶計画」は、若い映像作家が録画カメラを持って零落しつつある故郷の村に戻り、カメラを村の老人に向けてインタビューするもので、政府側によって「自然災害」と呼ばれた 1959～1961 年の 3 年間の大飢饉を記録するもの。「民間記憶計画」の若手作家たちには、章夢奇、鄒雪平、王海安、郭睿、舒僑、李新民らがいる。すでにこれまで 1000 人を超えるインタビューを行い、餓死者リストや数百万字のフィールドワークによるメモ、30 本のドキュメンタリー、演劇 5 本が生まれている。「民間記憶計画」は 2015 年「ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展」などに出品されたほか、アメリカ合衆国・デューク大学図書館のオンライン資料庫にオーラルヒストリーとして保存されている。賈氏はこの「民間記憶計画」の作品として「一打三反在白雲」と「我要當人大代表(私は人民代表大会代表になる)」を制作した。

以下、参考として、久保田桂子さんの紹介文。

<http://webneo.org/archives/6735>

台湾メディアの記事。

<http://commagazine.twmedia.org/?p=1842>

☆

今後の研究会予定

上映会 9 月 29 日(金) 19:00～ 専修大学 1 号館セミ室 胡傑監督「グラーグの書 張先痴の世界」日本語字幕上映

公開研究集会 9 月 30 日(土) 14:00～ 専修大学 1 号館 204 教室 張先痴ほか講演会「私はなぜ書くか 労働教養の記憶と記録」(仮)

10 月例会 10 月 26 日(木) 19:00～ 専修大学 1 号館セミ室 福岡愛子「文革研究の対象と方法 論文整理と見取り図構想の試み」

12 月例会 12 月 16 日(土) 15:00～ 専修大学 1 号館 204 教室 傅国涌「現代史における星火事件の意義」(仮)

6月の公開研究会と例会ほかをめぐって

中国の政権と個別具体的な人々を分けた方がいい

鳥本まさき

本誌編集部から、このところの会合について何か書くよう促された。6月例会の江雪さんの話について、少し補足しなければならないかなと思い、引き受けるともなく引き受けた。が、この際、不要かとも思うが、自己紹介と、このところの中国についての筆者の見方、対し方について、少し書かせていただき、それを前書きとさせていただきたく思う。

筆者は20年近く前の留学で中国の上海で3年ほど暮らし、少なくない人々と接して、中国人について、ある皮膚感覚とでも言いたい印象を得たと感じている者である。その後、直近では、日本の外務省の下請け機関とも言うる某通信社にて、中国の公開情報、特に中央テレビや新華社のような官製メディア、政府機関のウェブサイト上での発表などを翻訳・整理する仕事をしていて、国民国家と国民国家との関係、という視点から（それはフィクション的要素が強いと知りつつも）、中国を見、考えることが多かったように思う。

じかの中国、中国人と接することは少なくなっていた。オフィシャルなメディア報道に毎日接していたとはいえ、それが必ずしも、中国や中国人とじかに接していることになるとは限らない、それだけでは中国を考えることにはならないのではないかと、そう思い、仕事を辞めた。中国の国家およびその政権、というオフィシャルな、半ば架空の、しかし現実には深く差し込んでいっているそのメディア中心の世界からいったん身を離してみても、模索したいと思った次第である。

ところで、国家と国家の関係を中心に据えようと、何らかの態度決定を迫られるように感じる。というか、ある種の線引きがついてまわるようだ。少し前に騒がれた連舫民主党代表の「二重国籍」問題も、その背景にある現実との矛盾などを考えると、フィクショナルな線引きの典型的な例かもしれない。日本に生きる私たち個々の人間も、今年45年を迎えて

いる日中国交の影響から離れることはできまい。そう思う一方で、現実には、国と国との関係からはみ出る、いわばあいまいな事象が散見される。さらに、私たちの想像の世界は言うまでもなく、多様であり、自由である（べきだと思う）。このところ話を聞く機会のある中国のいわゆる「民主活動家」「異見人士」はことにこの想像力（＝構想力）を大切にしている。ここのところをどう考えるか。

中国人の訪日ブームと上野千鶴子氏の発言

数年来、観光客など外国人による日本訪問の勢いは目覚ましい。安倍政権は自身の功績と言いたげに見えるが、中国人による一時期の「爆買い」と観光ブームはほぼ必然の流れであったろう。円安とビザ緩和が要因とされる。そうだと思うが、最大の背景はやはり中国などアジア諸国の経済発展だろう。安倍晋三氏はむしろ自身の靖国参拝（首相就任約1年後の2013年12月26日）によって中国人観光客の激増を1～2年遅らせた、というのが真実なのではないか。だが、この勢いの速さには、いささか戸惑いを覚える人も多いのではないかと。尖閣問題における立場の違いによる訪日客の停滞は仕方ないところがあったと思うが、靖国参拝後の1～2年のブランク（日中関係は国交回復後最悪となった）とその後の訪日客の激増とのギャップは、日本人の戸惑いを増幅させているに違いない。というのも、この中国人の日本訪問ブームというのは、靖国問題という歴史問題の一応の「政治的解決」という不安定なものを基盤としているとも言えるからだ。（主要閣僚の）靖国参拝という歴史問題は、もちろん解決などしてはいないわけだが、2014年11月に訪中した谷内正太郎・内閣官房国家安全保障局長が楊潔篪國務委員との会談で合意した4項目の「原則的共通認識」で、両国の政府レベルでは収められたことになっているようで、中国政府はこれを機に日本観光へのゴーサ

インを出したという経緯を考えると、今般の訪日ブームは必然であるとともに、多分に政治的な要素を含み、不安定であると言わなければならない。だがもちろん、日本で、日中双方の人々の対面接触の機会が大幅に増えつつあるということは、素晴らしいことに違いない。しかし、この政治的にしっかりした根を持たない不安定さと性急さゆえに、それに伴う摩擦も、今後徐々に増えるかもしれない、と筆者は若干の危惧を覚えている。

以上、中国からの人々との対人接触の増加を政治的な文脈で述べてみたが、少し唐突ではあるが、社会学者の上野千鶴子氏が移民について触れた記事を見てみたい。

上野氏は今年（2017年）2月11日の東京（中日）新聞のインタビュー記事で「移民政策は客観的に無理、主観的にはやめた方がいい」と述べ、上野氏のイメージからはずれたその意外さが話題を呼んだ。氏は「客観的には、日本は労働開国にかじを切ろうとしたさなかに世界的な排外主義の波にぶつかってしまった」「主観的な観測としては、日本人は多文化共生に耐えられない」と言う。批判の多いこの指摘だが、筆者としてはこうした指摘も傾聴に値するものだと思う。上野氏の真意がどこにあるかを確認したわけでもなく、詳しく理由を述べることも能力的にできないのだが、上野氏は本質主義的な議論をしているのではなくて、やはり準備不足を指摘しているのであり、関係する議論やそれに伴う意識の改革がやはり必要だと言っているものと捉えたい。上野氏は同記事では触れていないが、「排外主義」や「多文化共生に耐えられない」と述べる先には、やはり、ヘイトスピーチ等があらうと思う。先に筆者が述べた危惧で念頭に置いているのもそうしたことである。安倍政権はヘイトスピーチを長く野放しにしていた。しかし、昨年（2016年）ようやく、懲罰規定がないなど徹底的でないとの批判を受けつつも、対策法が制定・施行され、一年経ち、ヘイトスピーチ自体の数が減るなど、それなりの役割を果たしているようである。法的な整備と意識の改革はおそらく並行するもので、さまざまな事態に備えて法的・意識的に準備しておくのは必要だ、というのを立証した形である。また、現実がかつてないスピー

ドで進行している現在、このスピードでよいのか、といったことも議論されてよいのではないか、と思う。

また、別の角度から述べることになるが、つい最近、福建省から留学に来ていたという横浜に住む若い姉妹が、日本人男性に殺されたとのニュースが流れた。「感情のもつれ」が原因ともいわれるが残忍な事件である。これまでの表面的な交流から、じかの交流へという関係の深化が（これまでにあることはあったであろうが）、こうした悲劇の発生を増加させる可能性は十分にあらう。「感情のもつれ」というものは、国籍の違いとは直接関係はない。一方で差別や偏見を元にして起こり得るヘイトクライムがあり、他方で感情に基づいたトラブル・事件も見られるようになる。こうしたことをどのようにとらえたらよいだろうか……。

人の往来が増えればそれとともにこうした対面接触の深化と等身大の関わりも進行していく、これは自然なことである。こうしたことと、政治のレベルや国家と国家のレベルとをどう考え合わせていったらよいのだろうか、あるいは別のこととしていく方がいいのか……。

筆者がこのところ、中国の方々との接触（本研究会周辺の方々を含め）を通じて感じているのは、中国の政権と個別の人々を分けたほうがいいのではないか、ということである。中国の政権、政府のイメージはいいものではない、と思う。日本と比べてもそれは言えるのではないか（反論はあると思うが）。中国に住む人々も（あるいは在日中国人も）、自国政府と自身の距離を常に推し量り、そのバランスの上で暮らしているのではなからうか。私たちが中国に接する際、「二枚舌」になるのはある面仕方がないところがある。中国の人々もそうなのではなからうか。戦後日本に生きる私たちは一応憲法に保障された民主主義制度の上で、政権批判をし、誤った道を歩まないよう絶えず政府を監視している。政府に対して一応の信頼がなければできないことではなからうか。一方中国ではどうだろうか。選挙により、政権を交代させることはできるだろうか。現状でそうすることができない以上、政権と自身との乖離・距離をいつも念頭に置いておかねばならないところがないだろうか。しかし、それを表現する際、「二

枚舌」というネガティブな表現を用いるならば、なるべくならその乖離・距離は統一・縮小されたほうがよいだろう。「二枚舌」は人間にはそぐわない。私たちは「一枚舌」という人間の当然の状態に向かって、努力していくべきであろう。

中国の政権と個別具体的な人々を分けた方がいいのではないか、という考えを述べたが、これは筆者がこのところ感じることを、自分としては大胆(?) かつ率直に言葉にしてみた、暫定的ないわば行動方針に過ぎない。今は、現時点では、中国政府と一般市民を分けるのがプラグマティックなのではないか、という程度のことである。日本でも安倍政権が国民の政治的代表性を有しているかと問えば、大いに疑問があるのは承知している。しかし、一般に、政府として、立法、行政として、やるべきことをやることは当然のこととして期待されているのであり、そこにある程度の信頼はあろうと思う。それを裏切るから現政権は今、批判されているのだ。中国では、そこに断絶があると言わざるを得ない。政府と市民に信頼関係や監視関係が日本のような形であるとは思えない。それが現実であるとしたら、それに基づき、中国政府と一般市民を分けるという、便宜的な行動方針があってもいいのではないかと筆者は考えるのだが、大げさな言い方でもあり、それほど熟慮した物言いでない代物なので、諸賢先輩方のご意見ご批判を、それに耐えないと予感しつつ、それでも賜りたいところでもある。

日本と中国の関係はここに来て、じかの交流が増え、実際の場の現実も目まぐるしく変化している最中である。これは私の頭の中だけの出来事ではなく、本研究会の周辺の方々と接していて、常に感じていることである。皆が戸惑い、模索している、そのような場をつくり出している研究会関係者に感謝したい。政治のレベルで変わらずとも、想像力だけはそうした現実に応じて、絶えず変化させていきたいものだ、と思う。

江雪さんの講演と中国メディアの行方

脱線的な前書きはここまでにして、より「草の根」(この語も政治的だろうか) 的な視点から、このところ本研究会ほか関連で行われたイベントへの感想

を述べてみたい。

先に、申淵氏の「反右派」に関する話を聞いた。上海から香港に移ったという方らしい。講演は貴重な研究成果について話され、勉強させていただいた。印象に残っているのは、申淵氏の内容とは離れるが、講演の合間にタバコを吸いながら話した内モンゴル出身で日本籍に帰化したという方との話だ。「南モンゴル」の「独立」や「自由」「民主」を求める活動に参加しているというその方と話していて、たとえば、中国の現政権、共産党政権が何らかの形で政権の座を明け渡すことがあったとしても、「中華思想」がなくなる限り、私たちモンゴル民族は漢族中心の「中国」の中にあって、彼らを信頼してはいけないうだろう、と言うのだった。

さて、江雪さんの講演のほうに移ろう。江さんの故郷と深いかかわりがあったという向承鑑氏については、アジア遊学『文化大革命を問い直す』に譲り、ここでは、胡傑監督の「星火」関連のドキュメンタリーを見たというだけの筆者が、急きょ江さんの通訳をすることとなり、うまく訳せなかったと思う箇所を、向氏ら「星火」グループに興味を持つに至った彼女自身の話に絞り、多少振り返っておきたいと思う(以下、江雪さんのブログ<http://jiangxue.blog.caixin.com/>にある記事などを交える)。

江氏は(筆者と同世代の) 1974 年生まれ。西安の地方メディアで記者をしていたという。転機は 2 年前の 2015 年、譚蟬雪さんの著書『求索——蘭州大学「右派反革命集团案」紀実』のコピーを送られたことだという。江さんは故郷甘粛省の天水市で起きたこの事件、大飢饉の時代に青年たちが秘密裡に『星火』という雑誌を作ったことについて知り、驚くとともに、自分の無知を恥じたという。

江さんは、本研究会例会に集まった私たちに個人的な動機について語ってくれた。父方の祖父が 1960 年の大飢饉で、父や叔母を残して餓死したという。その当時、蘭州大学の右派教師・学生 40 人が天水に下放された。この中に化学系の向承鑑、中文系の譚蟬雪、歴史系の張春元という「星火メンバー」が含まれていた。つまり、「星火メンバー」は、祖父が餓死したその様子を憤懣と批判の目で見つめていた、ということになり、いわば「見る目と見られ

る目」(被害と加害ではない)が55年を経て重なった、ということになる。江さんならではの出会い、と言うよりほかはない。

「星火」に出会った2015年、中国メディアはまさに「全盛期」を迎えていたという。同時に江さんはメディアの「衰退」とも語っていた。メディアの「衰退」とは、周知のとおり、習近平政権によるメディアのコントロールに他ならないと思うが、では「全盛期」とはどういうことか。筆者は、12年に党大会で総書記となった習近平氏が腐敗撲滅運動を進める絡みで、金を受け取り記事にするメディアというのが、ようやく同じく中国メディアで批判される、という光景をリアルタイムで見ていた。江さんのいう「全盛期」にはこうしたメディアの腐敗という背景もあったかもしれない、と察する。江さんは、「星火」との出会いを契機に「独立記者」としての道を歩んでいる。「独立」の際の「武器」となっているのがビデオカメラというのも、新しい気がした。

今回は日本の国際交流基金のついでで都議選を観察し、広島を訪問して帰国する、とのことだった。実りある訪日であったことを祈る。

6月例会レポートにかえて

「反右派」60周年に思う 反右派運動は誰にとって必要だったのか

福岡愛子

昨年(2016)は、文革50周年ということで、興味深い催しが多かった。その記憶のなかで、最近ふと思い出したことがある。中国社会文化学会のシンポジウム「文化大革命から50年」において、馬場公彦氏が日本での文革論議にふれた際に引用した文章で、竹内実氏が「毛沢東思想」の絶対化と「反革命」摘発言論の激化などに対して、次のように書いていたのだ。「不思議なのは、中国の知識人や黨員が、このような光景に対して、一矢をむくいうことができなかったことである。彼らのなかの、ただひとりも声をあげることは、できなかったのであろうか[「毛沢東に訴う——「牛鬼蛇神」その他」『群像』1968年8月号; 264]

そのとき私がとっさに思ったのは、反右派運動が

会合では、私たち日本側が団を組んで、江さんの故郷天水や西安などを訪問するのはどうか、という話が出た。実現すると楽しい話である。

土屋研究室の催しの関連でさらに、徐辛監督の『房山教堂』というドキュメンタリーを見た。遠藤周作の『沈黙』ほど時代が離れているわけではないが、民国期に存在したキリスト教信仰が、共産党政権下でも守り続けられたらしく、改革開放後に教会が復活したという山東省連雲港市にある村で撮られたものである。土屋氏が何年も前に『夜明けの国』を上映するため北京を訪れた際、徐監督の友人が上映に関わり、徐監督のDVDを渡されたのが土屋氏と徐辛監督の縁だという。徐辛監督はSkypeを通して、当日会場に集まった観衆と意見交換をした。徐監督の新作が山形国際ドキュメンタリー映画祭で上映されるそうである。監督はそのために秋に訪日する予定という。

以上、まとまりのないレポートになってしまったが、研究会をめぐって、この機会に思うところを述べさせていただいた。(とりもと・まさき)

中国の知識人に及ぼした影響の深刻さを、日本の研究者は全く理解していなかったのか、ということだった。しかしあらためて全文を読みなおすと、建国以前からの長い道のりをふりかえり、洞察に富んだかなりの長文のなかで、竹内氏が突如もらしたこの悲嘆は、逆に、文革の知識人弾圧という側面の重要性を再認識させてくれる。その意味で、1957年6月8日に反右派運動への動員令とされる『人民日報』社説「これはなぜか」が出てから60年目となる今年も、考えるべきことは多い。

私自身の拙い研究歴を顧みて、『青い嵐』(田壮壮監督、1994年)を観て文革に目覚め、研究を志してすぐに『文化大革命に到る道』(丸山昇著、2001年)に出会ったことは、幸いだったと思う。それぞれ、

スターリン死亡のニュースから紅衛兵登場まで、あるいは『武訓伝』批判から反右派闘争まで、文革に到る道程を丹念に描き出していた。反右派運動との関係を抜きに文革は語れないということを、強く印象づけたのである。

その後、中国の知識人自らが、痛恨の反省に基づく痛烈な体制批判を綴った『随想録』や『思痛録』が出版されていることも知った。そして今では、インディペンデント・ドキュメンタリーや当事者の声を通して、生きた現代史にふれることができる。ますます統制厳しいと言われ続ける当の中国で、タブー視されがちな歴史的事象に対する地道な記録の努力が絶えないことは、とりわけ貴重に思われる。

今年6月24日の研究集会で、かつて「右派」のレッテルを貼られた申淵さん（1936年生まれ）の話を聞くことができた。新中国建国以来、絶えまなく続いた政治運動や非正常な死について、数字を列挙し歴史的事実にもとづいて語る明快な口調は、とても80歳をこえた高齢とは思えないほどだった。

いわゆる「労改」については以前からよく聞いていたが、1957年7月から始まった「労働教養」は、労改とは異なり判決もなしに無期限非合法で行われる「行政手段」だったという。対象者に対する訓導が厳しく、釈放後も監視下におかれたらしい。今では廃止されたが、申淵さんは20歳から30歳までの貴重な10年間を内モンゴルの草原で過ごし、その間に文革を体験した。

会場からの質問に答えて、文革中のモンゴル人民革命党の弾圧や虐殺の実態を見聞きし、自分も牛棚に入れられた、とも語った。しかし、モンゴル人の党委員会書記が、申淵さんが12歳から革命に参加したことに感じ入って親切に世話してくれたり、電力設計院長が学習支援をしてくれたりして、釈放後も現地にとどまったという。そして環境問題の研究を続け、豊富な鉱物資源が「負の遺産」となっている実態を知ることとなった。

この研究集会当日に配布された本会誌第2期1号・2号には、申淵さんの予稿「反右運動の歴史的淵源とその深遠な影響」（2017.6.24）の他にも、土屋昌

明・矢吹晋両氏の興味深い論考が掲載された。ここでは、反右派運動前後の経緯や毛沢東の意図に関して、以下の論点が示されている。これらについて、丸山昇氏の前掲書を参考に加え、また被害当事者である申淵さんの認識と比較しながら、私なりに何が追加できるか考えてみたい〔以下、敬称略〕。

(1) 毛沢東は、右派／反共分子に対する攻撃を初めから意図して「百花斉放・百家争鳴」を呼びかけ、彼らをおびき出したのか、

(2) そもそも「百花斉放・百家争鳴」は毛沢東の意図ではなく、スターリン批判の影響を受けた中央政治局（劉少奇・陸定一）のアイデアだったのか、

(3) いずれにせよ、「反右派運動」への転換はいつ／いかにして起ったのか

毛沢東の意図について、丸山昇は「プロレタリア独裁」概念をもとに、農民や革命的知識分子、ブルジョア分子らもそこに参加可能か否かの「境界線」問題として、1947年にまで遡って検討している。邱路なる人物が「ソ連崩壊後流出した保存文献資料」に依拠して書いた文章の引用部分は、申淵が1947年11月30日に毛沢東がスターリン宛に打った電報について書き出した段落の内容と、ほぼ一致する〔丸山2001: 395-397〕〔申淵2017: 27〕。

丸山は、毛沢東が自由資産階級と彼らの右翼的政治傾向に不信を抱き早くから中国共産党以外の勢力を排除したがったという事実と、その構想がスターリンから制止されたために「反右派」となって生き返った」という説を紹介している〔朱正1998『1957年の夏季』〕。しかし丸山自身はむしろ、1955年末から毛沢東・周恩来ともに、知識人の扱いについて辛抱強い教育的な態度や配慮と敬意を求めている、と指摘する。丸山によればそれは、文化的格差の大きい社会における庶民の側の偏見・反感と知識人の側の特権意識やコンプレックス、という複雑な問題への対応でもあった。

そのような比較的ゆるい状況は、「スターリン批判」後さらに進み、1956年5月2日には、毛沢東自らが「百花斉放・百家争鳴」のスローガンを提起した。毛は同年4月の拡大政治局会議でも「芸術においては百花斉放、学術においては百家争鳴」とすべ

きだと述べた。それらの内容を系統的にまとめて、陸定一（中央宣伝部長）が科学者・文学者・芸術家たちを前に講演し、それが正式文書として公開されたのだという。従って丸山によれば、毛沢東の直接関与と知識人政策における一定の連続性が強調されている、といえる。

「百花斉放・百家争鳴」が公然と呼びかけられた後も、知識人の反応は鈍く、むしろ「雪解け」傾向に対する疑問や批判の声があがった。毛沢東はそうした声を正し、1957年2月の最高國務会議において、「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」と題する講話を行った。それは、申淵も、多くの人々が「やっと春が来た」と感じた、と書いているように、指導者による民主の必要性を強調した画期的な内容だった。しかしその講話がかなり手を加えられて公表されたのは、中共の方針が反右派闘争に転換した後の6月19日だった。

丸山昇によると、その間の経過は以下の通りである。当初1958年に開始する予定だった「整風運動」が1957年4月27日に指示され、4月30日以降、民主党派や民主人士座談会などが多数開かれた。それ以前から、知識人の多い各大学では「人民内部の矛盾」講話をめぐる座談会が活発になっていた。その内容は中宣部の党内出版物の中に残っており、かなり先鋭的な意見も噴出したことがうかがえる。

こうした経緯にたずさわったのが、当時の統一戦線部長であり「鳴放」の実践上の責任者だった李維漢である。丸山が引用する彼の回想によると、上記座談会開始当初は、毛沢東にも「反右」の意図はなかったという。やがて辛辣な発言が報告されると、毛沢東は『人民日報』に発表することを決め、「反駁するな、言うだけ言わせろ」と指示した。それを受けて、李維漢は「反右」の思想準備を始めたといい、丸山は「転換が5月中旬から準備された」とみる。

こうして毛沢東は「事は変化しつつある」を書いて内部配布する（公開されるのは1977年4月）。これは一般に1957年5月15日の文書だとされているが、丸山は、その最終定稿が出たのは5月20日より後だった、という朱正の説を紹介している。5月20日までに連発された「指示」とは違って、「事は変化しつつある」では、「右派すなわち修正主義者」とい

う認識が明確となり、「党内外の右派はみなもの極まれば必ず反するという弁証法を知らない。我々はどうしばらく彼らを猛り狂わせ、彼らを頂点まで行かせてやろう」と書かれているからだ。

この文言によって丸山は、毛沢東が単に「もう少しばかり」待つだけでなく「具体的な手を打っていた」のだ、と確信する。その上でなお、「鳴放」の開始自体がすべて仕掛けられた罠であったとする見方は「成り立ち難い」、と反論する。「反右派」への転換を決意した後に、特定のターゲットに向けた意識的・組織的「引蛇出洞」工作がなされた、とみるのである。

そして、丸山が衝撃的に描き出した「転換」の瞬間は、5月18日夜、当時『文芸学習』副編集長だった黄秋耘が作家協会副主席の邵荃麟の家にいたことだった。黄秋耘の記憶によると、9時20分に周揚から電話があり、たちまち顔色を変えた邵荃麟は、恐らく緊急会議のために、出かけて行った。幹部クラスでさえ電話一本で「青天の霹靂」を免れない——そのような緊張を強いられ「知識人の無力・怯懦」を蔓延させるような事態は、まさに反右派運動から始まったのである。

このように、1957年の5～6月について数々の公式文書と個人記憶に依拠して詳述する作業は、「転換」に注目する立場ならではの成果であろう。申淵も、自らの体験や記憶だけを頼りに論述しているわけではないが、彼が毛沢東の知識人弾圧の意図の長期にわたる一貫性を強調するあまり、文革を「もう一つのより大規模な反右運動」[申淵2017; 34]と断じてしまうことには疑問が残る。

それにしても、本稿でとりあげた3点にもまして、ずっとしりと重く響いたのは、申淵の「反右派運動は本当に必要だったのか、いったい誰にとって必要だったのか」[申淵2017; 36]という問いである。1989年の「六四」後に香港に移り住んだ申淵は、「一国二制度」の公約がぐずれゆく現状についても、厳しい見方を示した。日本で今年7月に公開された香港映画『十年』を見た後では、「六四」についても、香港に対する締めつけについても、そして各国の強権的な政治がもたらす悲劇のすべてについても、同じ問いを発したくなる。

（ふくおか・あいこ）

蔵出し批評

文化大革命は階級闘争である 学者文化人の懸念に答えて (1966.8)

西順蔵 解題・前田年昭

【解題】西順蔵 (1914-1984) は、戦後日本の代表的な中国思想史研究者である。『原典中国近代思想史』全 6 冊 (岩波書店、1976) を編んだ。

始まったばかりの文化大革命について当時、「学者文化人」の多くは戸惑い、怯えて、事実を直視しようとしなかった (本質的には現在も変わっていないのだが)。彼はここで、学問や文化はだれのものかを問うている。この根本、つまり立場の問題を忘れるということは、学問や文化を拵えてきた人びとの歴史を見ないことに等しい。「中国の文化大革命は、それが権力闘争であり国内ひきしめであるということによって、学問文化の雲そのものにむけられてお

り、これを人の生活する地上にひきおろそうとするものである」という指摘は、自らの学問や文化を、地上の対立の局外に置いて問うことのない人びとには理解できないだろう。66 年 8 月である。同時期にどのような論評がなされていたかをみれば、その鋭さは群を抜いていた。

西順蔵の見方考え方の根底には、「毛沢東思想が人民の考えたことでないというのも、毛沢東思想が、人民自身は考えなかったことを気づかせるものであることを意味する、のであろう」〔傍点は引用者〕という、人民大衆への信頼がある。学問も文化もここを離れてはありえない、という確固とした立場がある。

一、学者文化人は学問文化のために、そして多分学者文化人のために、いささか心配した。中国では伝統文化が否定され、学問の自律が犯され、専門家をさしおいて文化批判が労働兵大衆の手に任せられ、その大衆には毛沢東思想の卑俗な実用的学習がゆきわたろうとしている、これでは中国の文化学問はどうなるのだろう、といった心配である。心配でなければ嘲笑だったかも知れない。心配はもちろん中国のための心配でなく、おのれの学問文化意識のためのそれであり、嘲笑あるいは政治優先の国なら文化も手段だ、といったものだろう。

やがて北京市党委員会とか彭真とか周揚とかの名が記事に現われ解放軍報の社説が注目され、さらに中央に文化大革命小組など、そして学生の間から紅衛兵が出現した。劉少奇の名とともに権力闘争という文字が読まれた。学者文化人は、そこで、やっぱりそうだったのか、と心配は解け嘲笑はシタリ顔を加えた、かも知れない。

文化大革命は文化学問の問題ではなかったのだ、権力闘争とか国内ひきしめのための手段だった、ということである。そして学者文化人は学問文化の雲

の上ののって文化大革命の砂あらしに肩すかしをくわせることができた、かもしれない。

中国の文化大革命は、それが権力闘争であり国内ひきしめであるということによって、学問文化の雲そのものにむけられており、これを人の生活する地上にひきおろそうとするものである。文化の雲上で革命するのではなく、大々的に文化の命を革する、ものである。文化大革命とはこういうものだろうと私は思う。そうだとしたら、このような文化大革命の是非は論じないとして、問題はのこっている。学者文化人の心配は解け、嘲笑にシタリ顔が加わったところで、学問文化の心配は深まり嘲笑にはコワバリ顔が加わる。

二、中国共産党やその機関紙の言うところによると「文化大革命は階級闘争である」。「それはそうだろう、中国は共産主義国家なのだから当然だ」ということは誰も思うだろうが、これを肯定的に思うか否定的に思うかの違いがどこから出てくるかは、誰もわからない。

文化大革命運動の「主要な対象は、資本主義の道

を歩む党内の実権派」であり、批判の対象は「ブルジョアジーの反動的な“権威”」である。“権威”とは党の権威をもってその実のないもののことであろう。このたびの運動で槍玉にあがったものは、学問文化の世界についても党の人間である。この運動はなによりもまず党内の整風運動である。

権力闘争といっても“覇権争い”とは限らない。階級政党はがんらい権力闘争の党であり、そして、中国共産党は中国民族の反帝国主義・反封建主義解放闘争の思想上の結実といえる毛思想をもっていて、これが権力の内容規定をしている。この内容を争うのが権力闘争である。内容なしの、権力の自己目的といった、自主独立とはちがう。内容にもとづいた自主独立だから、“国際的にはますます孤立”することもあるけれども、その“孤立”の内容、土台は「大衆路線」にあり、「世界の革命的人民がわれわれによせている期待」にこたえることにある。そこで、この整風運動は、中共の原則である階級主義にもとづいて、「九五%以上の」人民階級的要求を土台とする次第である。

権力の内容が争取できれば、個人のことは個人がえらぶわけであって、権力は個人を彼が自分につくりあげた内容にしたがって処遇する。個人そのものは抹殺しない。軍人の彭徳懷も哲学者の楊献珍も、いまもそれぞれの地位についているだろう。

三、このたびの文化大革命がなぜ「大」なのかと思うに、けだし、文化内容をつくるものが階級的な人民大衆である、とされるからである。人民大衆に文化などあるまい、というのが学者文化人の思いであろうが、正にそうかも知れない。ない文化をつくるから「新」というのであり、したがって現在のは「旧」というわけである。文化は階級を超えた実質をもつかも知れないが、だからといって新旧がないと言うことはできない。新であるかぎり旧は否定される。

新旧を階級的に考えるから、封建制時代のものは、その時代ではよいものでも、当時の人民のものでも、やはり封建的である。資本主義の世界のものも同様である。新しい階級は、文化というものに、まして在来のそれに、なんらのギリも持たないので、かれらにとって具合のわるいものは、過去においてはよ

かったものでも、やはりわるい。——この考えは、ほとんど一〇年来、中国の学界で、哲学・道徳の遺産継承の問題として論じられた、その帰趨でもある。——具合のわるいものは破壊するが、人民大衆は社会をなして生きるからにはやはり、文化をもたねばならぬので、かれらに適合し必要とする文化をつくり出す。その創出建設は破壊の過程で行われるだろう。「破壊してこそ建設」と言われている。

この人民大衆による旧文化破壊新文化建設が、文化大革命の基本的な側面であってもう一つの側面である“権威”に対する批判もこの人民大衆による批判である。紅衛兵はその激烈な現われである。

愚昧なる人民に文化のことを任せてよいのか。愚昧であるかないかは知らず、人民のほかには人民はない、とでも中共は答えるであろう。中国の文化の伝統はここに絶えるのか。こんな心配は、浅くて薄っぺらな文化伝統の歴史にかじりつきたい人たちの心配かも知れない。重厚な文化の歴史の中に在ると、破壊も建設も数十年数百年の射程を設けて、徹底して行って不安がないのかも知れない。

四、文化のない人民から文化を創出する、というやり方は、あの「農村から都市を」というやり方、もっとも後れたところからの革命運動の方式そのもののようである。資本主義だろうが社会主義だろうが、その“先進国”にも“中進国”にもなろうとしないで“後進”する。

中国民族解放の社会主義的革命ができたのは、それがおよそ、民族意識から遠く、およそ資本主義に無縁なとき中国農民を基盤とした、その中国農民こそが、帝国主義に侵略された中国に住む人民の大多数だったからである。中国は自国の階級闘争の経験を、いまは、国内で保持するだけでなく、世界的に保持する。社会主義国となった中国は、中進国としてラクに繁栄していくつもりなら社会主義先進国の援助のもとに建設にはげむことだろう。そして中国自身のもとに社会主義後進国をひきつれていこうとするかも知れない。

だが、こういった“繁栄”の先進後進こそが抑圧搾取の構造であることを、中国はその解放闘争の経験から知っている

文化に対してもこんなふうな考え方をするのだから、その文化の意味は徹底的であって、「思想・文化・風俗・習慣」のことである。権力が利権と結びついているというのは一つの風俗であり、それはケシカラヌことだが致し方ないというのは一つの考えの習慣である。これを一つ一つ最底辺から摘発し掘りあげていく、これが文化の「破壊」でありそして文化の「建設」につながるわけである。そういった文化のことを考えている。

五、旧文化を破壊し新文化を建設することになっている人民大衆、それは愚昧な集団であって、盲目的であり、引率されるものであるにすぎない、とすれば、人民大衆を基礎とすると称するいかなる革命も、人民大衆に甘言を弄してしかも人民大衆から無縁な何物かの仕業である。

中共はこう言っている。「人民大衆のあいだに異った意見が存在すること、これは正常な現象である」「討論を行う場合、文闘（道理による闘争）によるべきで、武闘（暴力による闘争）によってはいけない」「討論では、ひとりびとりの革命家が、自分でものを考えそして憚ることなく考え・言い・為す」ことが要求される。何を考え・言い・為すのか、といえ、けだしそれは破壊・建設についてであろうが、肝要なことは「自分で」「憚ることなく」、つまり、ひとりびとりの思想解放を階級闘争の起動力とすること、これが文化大革命である。

こんなふうだから“ゆきすぎ”も起るわけだ。団結・組織を大事と守るためなら、たとえ人民大衆が自分でものを考えるひとりびとりから成っていても、それを表現する途を開けないで、何かの大義名分、階級とか組織とかの名分でもって、まとめようとするだろう。だが中共は“ゆきすぎ”歓迎の伝統がある。こんども「騒ぎが起るのを恐れてはならない」と言っている。騒ぎが起り、ゆきすぎがあるたびに発展があるというのは、例の「一は二に分れる」哲学である。これは「二は一に合する」哲学が閉鎖的・保守的団体の哲学であるのに反対した、一、二年まえの論題であった。整然たる革命集団といったものは、毛沢東はがんらい考えていない。

六、だがしかし、「思いきって大衆を立ちあがらせる」とか「大衆に自分で自分を教育させる」とか言っているように「させる」のではないか。毛思想についても、これは人民の考えたことではなく、毛主席の天才的な考えだ、などと言っているのではないか。

「させる」というのは日本語訳であって、がんらい「途をあける」とか「任せる」とかいう意味のことばである。それは“思想・言論の自由”以前のことである。毛沢東思想が人民の考えたことでないというのも、毛沢東思想が、人民自身は考えなかったことを気づかせるものであることを意味する、のであろう。

毛思想の学習をすすめて、これを文化大革命を推進する力としているのは、すでに人民に対する天降りの方式ではないか、という疑問も、この辺りから考えてゆくことができよう。

七、文化大革命の意味を全面的に検討することは、私はできずに。書籍・雑誌・新聞にいろいろ書いてある。私が試みたのは、中国の言い分はかくかくしかじかであり、その意味はかくかくしかじかであろう、ということである。中国の言い分が事実にあっているかどうか。過去においては事実にあっていた、と考える。現在将来については知らない。過去の事実に対する評価、現在の言い分に対する批評は、私のここでの、仕事でない。

文化大革命のことで、一般的に中国のやり方を批評して、精神主義・道徳主義・お手本主義・愚民思想など依然たる“シナ思想”である、という意見もあろう。そうかも知れないが、それにしても、このようなレッテルがはられる、その実体はどんなものであるのかを、「ひとりびとりが自分で考え」「憚ることなく考え・言い・行為」するように、と途をひらいてくれる勢力があるかどうかを「考え」てみたい。およそ、そのような勢力のないところでこそ思想言論の自由がある、という考えがあったら、中国人はこれもまた「迷信」である、というだろう。

(一九六六・八・三〇『一橋新聞』八〇〇、『中国思想論集』筑摩書房、一九六九に収録)

胡傑監督『林昭の魂を探して』字幕（その1）

土屋昌明 編訳

前言

胡傑監督『林昭の魂を探して』（1999～2005年、撮影地：中国、115分）は、林昭という一人の女性の人生を、彼女の友人たちへのインタビューと残された文書や写真によって追跡するインディペンデント・ドキュメンタリーである。

林昭は北京大学の学生で、1957年から翌年にかけておこなわれた反右派闘争に疑問を持ったことで右派とされ、その後、甘粛省の反体制地下出版事件である星火事件などに関わって投獄された。しかし、獄中でも民主を求める自分の意見を変えず、血書によって自分の主張を記録した末に、1968年4月29日に監獄から連れ出されて殺害された。

中国国内で彼女の事績は、文革終結後の一時期、文革を否定する材料のひとつとして紹介されたが、80年代以後、好ましからざる話題としてとりあげられることがなくなった。90年代末までには、ほとんど知られなくなっていたことが、本映画の冒頭にある胡傑監督本人の述懐からもわかる。

この状況は日本でも同様で、たとえば1999年第1刷の『岩波現代中国事典』には項目としてとりあげられていない。このドキュメンタリーを制作した当時の胡傑監督に注目することから、本映画に描かれた林昭の事跡に関しても述べているものに、フィリップ・P・パン著、鳥賀陽正弘訳『毛沢東は生きている：中国共産党の暴虐と闘う人々のドラマ』（東京：PHP研究所、2009年9月、原書名：Pan, Philip P. Out of Mao's shadow : the struggle for the soul of a new China.）がある。これが日本では比較的早いまとまった紹介であろう。ただし、本書が述べる胡傑と林昭の事跡は、胡傑への取材と本映画によるところが大部分のようであり、そのほかの資料はソースが示されていないので検証しようがない。うえ、叙述には潤色が施されている。2012年12月に阿部幹雄ほかによって翻訳出版された銭理群『毛沢東と中国』（青土社、原書も2012年出版）が、おそらく日本では価値の高い紹介だったであろう。本書では、上巻201ページからわずか2ページ分しかとりあげていないが、林昭を北京大学における民主活動とそれに対する反右派運動の概説のなかに位置づける叙述で、そ

のあと、414ページからは、6ページにわたり星火事件についても述べている。銭理群は林昭のことを「すでにわが民族の誇りとなった」と断言し、あたかも林昭の評価が市民権を得たかのごとく言っているが、実際にはまだそうではない。思うに、胡傑監督の本映画によって、多くの人々が林昭について知ったことを踏まえて言っているのであろう。銭理群本人も、本映画に出演している。最近では、土屋・本会編『文化大革命を問い直す』（勉誠出版、アジア遊学、2016年11月）に陳継東「林昭の思想変遷」が発表された。本論は林昭のテキストの詳細な読解を踏まえてその思想を論じたもので、それまでの英雄的行為の賞讃や伝記研究をはるかに超えた内容を達成している。陳も胡傑監督の本映画を鑑賞したことから、林昭の研究に入った。ほかに、王友琴ほか共編共著『中国文化大革命「受難者伝」と「文革年表」』（集広舎、2017年4月）の第6章として「林昭—文革受難者を象徴する人物として最も有名な元北京大学女子学生」と題した小林一美の論文がある。この論文では15ページにわたって詳細に林昭の伝記や文章が紹介されており、参考に値する。内容的には、その冒頭に示すように、林昭の親友だった張元勛の「北大往事与林昭之死」におもにもとづいているようである。末尾に胡傑監督の本映画にも言及し、「内外に大きな反響をよんだ」としている。ただし、この論文では星火事件が言及されていない。思うに、137ページに引用された邱隱帆「獄中日記：林昭最後の日」で、林昭の言葉として提示されている「北大の同学たちが訪ねて来て、大光珈琲館に集まり……」が、『星火』のメンバーとの接触を言っており、「北大の同学」とは顧雁のことであろう（邱隱帆のこの日記が事実を記しているならば、である）。また小林は、林昭を文革の犠牲者とするようなかつての評価に立脚しており、文革以前に投獄された彼女がなにゆえ「文革受難者を象徴する」のか、突っ込んだ説明がほしいところである。本書については、前田年昭による的確な書評がある（本誌第2期第2号所載）。

このようにみても、胡傑監督の本作が林昭および星火事件について追及し、それがDVDおよびインターネットを介して全世界に拡散したことは、非常に大きな成果だったと言える。逆に言えば、林昭および星火事件についての解釈を与えてしまったことにもな

る。本映画を批判し、その解釈を超えていくことこそ、今後必要なことであろう。そのためにはまず、取り上げられたインタビューおよび胡傑の解説をテキスト化しておくのが便利であって、以下に字幕とその翻訳を掲載するゆえんである。

以下の中国語字幕は、2005年中国語版にもとづき、画面のインタビューと対照して、明らかな誤りは訂正した。日本語字幕は、同バージョンにもとづく土屋作

成の2013年11月日本語版によりつつ、以下の翻訳では、あらためてより正確に翻訳しなおした。字幕の日本語訳には字数の制限があり、また2013年の段階では勉強不足だった点もあるからである。監督本人が質問を發している部分は、語り手を「胡傑」と表示するが、ナレーション部分はすべて監督自身の語りなので、「解説」と表示した。

『林昭の魂を探して』 字幕と翻訳

001



胡杰：4年前、我听到一个关于北京大学女学生，在上海的提篮桥监狱里用自己的鲜血书写了大量勇敢的充满人道激情的血书，最后被监狱秘密枪决的故事。这个女学生的名字叫林昭。那时，我是第一次听到这个名字。1957年的“反右”运动之后，整个中国大陆都停止了思想，并生活在谎言与恐怖之中，是这个女孩开始进行了独立的思考，在狱中，当被剥夺了笔和纸的情况下，她用发卡当笔，刺破自己的手指，在墙上、在衬衣上书写血的文章与诗歌。这个故事使我最后作出一个决定。放弃我的工作，去远方寻找林昭飘逸的灵魂。

胡傑：4年前、ある北京大学の女子学生のことを聞いた。彼女は、上海の提籃橋刑務所で、自分の血によって、勇敢でヒューマンズムに満ちた、心の叫びを大量に書き、最後には秘密裏に銃殺された。この女子学生は林昭という。そのとき彼女の名前は初耳だった。1957年の「反右」運動後、大陸はどこも思考停止し、人々はみなデマと恐怖のなかに暮らしていた。その時こそ、彼女が独立した思考をはじめたときだった。獄中、ペンと紙を奪われた状況で、彼女はヘアピンでみずからの指を裂き、壁に、肌着に、血で文と詩を書いた。この話は、最終的に私にある決心をさせた。自分の仕事を辞めて、彼方に漂う林昭の魂を探しに行こうと。

002

寻找林昭的灵魂

林昭の魂を探して

003



1999年，上海。

1999年 上海。

倪竞雄：林昭的苏南新闻专科学校同学。

倪競雄：林昭の蘇南ジャーナリズム専門学校の同級生。

倪竞雄：我们去访问监狱的医生他说：她是从病床上拖出去的，他看着她从病床上拉出去执行枪决的。

胡杰：她是从哪一个病床上被拖走的？

倪：监狱的卫生室。也不叫医院吧，就是病号住的地方，她好像还住肺病、肺结核的病房。

胡：住着院就拖走，

倪：就在病床上拖出去枪毙的，他说好像是上午，至于拖到什么地方去枪毙，他说不清楚。

胡：那是什么监狱的病床？

倪：提篮桥，这个医生是提篮桥监狱医生。他因为我们作为私人亲友访问，也没带什么介绍信，讲的时候还有很多顾虑。

倪競雄：私たちが訪ねた監獄医がこう言っていた。

彼女は病床から連れていかれた。自分は彼女が病床

から引き出されて銃殺を執行されたのを見ていた、と。

胡傑：彼女はどこの病床から連れていかれたんですか？

倪競雄：監獄の衛生室だ。病院とは呼べないだろう、病気の囚人がある場所だ。彼女は肺結核の病室にいたらしい。

胡傑：入院しているのに連れて行かれたのですね。

倪競雄：病床から連れて行かれて銃殺されたんだ。午前だったらしい、どこに連れて行かれて銃殺されたのかは、彼にもわからないと。

胡傑：どこの監獄の病床？

倪競雄：提籃橋監獄だ。あの医者は提籃橋の医者だった。私たちは林昭の友人として個人的訪問だったし、紹介状もなかったから、話しているときにいろいろ配慮をしていた。

004



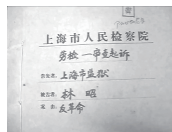
公共汽车报站音：提籃橋到了，请从后门下车，开门请当心。

車内放送：提籃橋駅につきました。後ろのドアから降りてください。ドアが開きますからご注意ください。

上海提籃橋監獄

上海提籃橋監獄

005



1965年監獄为林昭加刑的报告

1965年に監獄が林昭に刑を執行した報告書

上海市人民检察院 被告者：林昭 案由：反革命

上海市人民检察院、被告人：林昭、事由：反革命

解説：在我见到的这份监狱为林昭加刑的报告中这样写道：关押期间(林昭)用发夹、竹签等物，成百上千次地戳破皮肉，用污血书写了几十万字内容极为反

动、极为恶毒的信件、笔记和日记……。公开污蔑社会主义制度是：“抢光每一个人作为人的全部一切的恐怖制度。”“是血腥的极权制度。”她把自己说成是：“反对暴政的自由战士和年青反抗者”。对无产阶级专政和各项政治运动进行了系统的极其恶毒的污蔑。

解説：私がみた、林昭に刑を下す監獄の報告書には次のようにあった。「拘禁中、林昭はヘアピンや竹べらなどで何百回も皮や肉に傷をつけ、血で数十万字にのぼる、反動的で悪質な内容の手紙・メモ・日記を書いた……。社会主義制度を公開の席で侮蔑してこう言った。「人としてのすべてを奪い去ってしまう恐ろしい制度」「血にまみれた全体主義制度だ」と。林昭は自分を「暴政に反対する自由の戦士であり若き反抗者」という。プロレタリア独裁と諸政治運動に対して、悪辣を極めた一連の侮蔑を行なった」。

006



解説：林昭在她称为的红色牢狱中度过了八年。在她的文稿中这样写着“我经历了地狱中最最恐怖最最血腥的地狱，我经历了比死亡本身更千百倍的惨痛的死亡”。

解説：林昭は彼女の言葉でいう「赤い牢獄」で八年をすごした。彼女の原稿にはこう書いてある。「地獄でも最も恐ろしく最も血まみれの地獄をみた。死そのものよりも何百倍もひどい無惨な死を体験してきた」。

007



1999年北京。

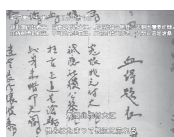
1999年、北京。

许觉民——原中国社会科学院文学所所长 林昭的堂舅。

許覚民：もと中国社会科学院文学研究所所长、林昭の父方のおじ。

许觉民：档案不能发，这是死规定，这是高等法院有批示的，不能发还本人，因为这里头主要的原因，一方面是日记，一方面是控诉，一方面还有不少诗。有不少骂毛（的文章）骂的很厉害，他们叫“恶攻”，恶毒攻击十分厉害，所以不能发。

許覚民：檔案は開けられない。これは絶対の規定なんだ。高等裁判所の指示で、本人には戻せない。主たる原因は、なかに日記とか、告発文とか、詩文も多い。毛沢東をひどく非難したものもある。当局は「悪しざまな攻撃」といった。あまりにひどく攻撃しているから開けられないのだ。



008

解说：林昭在狱中留下了大量的诗歌，她针对毛泽东的诗，在狱中的《血诗题衣》里写到：

双龙鏖战玄间黄，
冤恨兆元付大江。
蹈海鲁连今仍昔，
横槊阿瞒慨当慷。
只应社稷公黎庶，
那许山河私帝王。
汗惭神州赤子血，
枉言正道是沧桑。

解説：林昭は獄中で大量の詩歌を残した。毛沢東の詩をなぞって作っている。獄中で書いた「服に血で詩を書く」にこうある。

天地の間で双竜が戦い、
怨恨はたまって長江に流れる。
海上に身を隠した魯仲連は今も同じ、
矛を横たえた若き曹操は悲憤する。
お国と人民のためだけに身を捧げるべく、
天下を私する帝王を許すまじ。
愛国の赤子の血に恥じよ、
正道をまげるのが世の習いか。

毛泽东 七律《占领南京》

钟山风雨起苍黄，
百万雄师过大江。
虎踞龙盘今胜昔，

天翻地覆慨而慷。

宜将剩勇追穷寇，

不可沽名学霸王。

天若有情天亦老，

人间正道是沧桑。

毛沢東 七律 「南京の占領」

鍾山には風雨のように世直しの兵、

百万の大軍が長江を渡る。

竜虎のいる盤石な陣地も今は遠い、

天地がひっくりかえて悲しんでいる。

わが軍は勢いあまって敵を追いつめるが、

霸王の名前を得ようというわけではない。

天に心があるなら天も老いる、

人間世界は移り変わりが正道だ。

009



解说：林昭1932年12月生于苏州，中学就读于苏州景海教会学校，并积极热忱的参加共产党的组织。

解説：林昭は1932年12月蘇州生まれ。中学は蘇州景海教会学校で学び、積極的に共産党の組織に参加した。

解说：林昭的档案中是这样记录的：被告林昭33岁，苏州市人出身伪官吏，本人学生原北京大学学生，1958年沦为右派分子留校查看，1959年借口养病返沪不归，捕前住本市名南路159弄11号。判20年。

解説：林昭の檔案にはこう記録されている。被告林昭33歳、蘇州市の人、偽官吏の出身、もと北京大学学生、1958年に右派分子として学内残留で審査され、1959年に病氣療養を口実に上海に戻って帰学せず、逮捕前は上海市名南路159番11号に住む。懲役20年。

解说：在另一张林昭家庭及历史情况中说：母系苏州市民革委员，政协委员，早年参加过共产党，后又参加国民党，抗日战争期间偕同林昭一起坐过牢。父系伪官吏，反革命管制分子，管制期间畏罪自杀。在这里补充一点林昭父亲的资料：林昭的父亲彭国彦早年在英国留学，1922年考入东南大学主修政治经济，

1926年毕业论文是《爱尔兰自由邦宪法述评》。1928年9月在国民政府举办的第一届县长考试中获第一名被任命为苏州吴县县长。

解説：別の頁には林昭の家庭と歴史状況が次のようにある。母親は蘇州市人民革命委員、政治協商委員、早くに共産党に参加、後に国民党にも参加、抗日戦争中には林昭とともに投獄された。父親はもと国民党の官吏、注意監督の反革命分子、注意監督期間中に罪を恐れて自殺。ここで林昭の父親について資料を補足すると、林昭の父親の彭国彦は、若くしてイギリスに留学、1922年に東南大学に入学し、政治経済を修め、1926年の卒業論文は「アイルランド自由国憲法について」。1928年9月、国民政府が実施した第一回市町村長試験で一位になり、蘇州呉県の県長に任命された。

010

苏州：街巷牆上写着“拆”字。

蘇州の街角の民家壁面に「取り壊し」の注意書き。

解説：林昭童年時の家已被大規模的城市改造拆掉了。

解説：林昭の幼少時の家はすでに再開発で取り壊されていた。



011

陆震华 林昭的中学同班同学。

陸震華：林昭の同級生。

问：你们在教会学校的课程是怎样安排的？

陆震华：课程全部跟当时的国民政府颁发的教学大纲完全一样，所不同的就是比较对英语课程稍微多一点，还有一个东西学生每个礼拜天要到礼拜堂去做礼拜，这是硬性规定。就是你不信教的人也得要跟着学校里安排上礼拜堂。

问：那当时你啊，林昭都要去。

陆：也都要去。这个免不了的，没办法的。

问：你觉得这样一个礼拜的形式最后对林昭是不是有

什么影响？

陆：这个我没有想过，但是我想我是受过影响的，因为我的家庭本身就是基督徒。

胡傑：教会学校のカリキュラムはどんなだったか？

陸震華：カリキュラムはまったく当時の国民政府が出した教学大綱と同じだった。違うのは英語の授業が多めだったこと。あとは、学生は日曜にチャペルに行って礼拝しなければならないことで、そういう決まりだった。信者でなくても学校の規定通りチャペルに行かなければならない。

胡：当時はあなたも林昭もみんな行った？

陸：そう。しょうがないんだ。

胡：チャペルでの礼拝というかたちは、結果的に林昭に何か影響しただろうか？

陸：それは考えたことがない。ただ私自身は影響を受けた。うちはキリスト教徒だったから。



012

解説：在这个一时期，作为共产党秘密组织的成员，林昭以她少年时就显露出的文学天赋撰文抨击国民党腐败政治，热情参加地下党组织的话剧义演，成为苏州城防司令部黑名单上的人。1949年6月，她不听母亲让她去美国留学的劝告，与家庭决裂，考入中共苏南新闻专科学校。

解説：当時、共産党の秘密組織メンバーとして、林昭は若くして発揮された文学の才能をかわれて、国民党の腐敗政治を糾弾する文を書き、地下の党が組織した現代劇に積極的に参加、蘇州防衛治安部のブラックリストに載る人となった。1949年6月、母親がアメリカ留学を勧めるのを拒み、家族と決裂、中共蘇南ジャーナリズム専門学校に入った。

013

1949年老纪录片资料：毛泽东宣布中华人民共和国成立。

毛沢東が中華人民共和国の成立を宣言する1949年のドキュメンタリー映像。

〔次号につづく〕